



臨床と宗教

死に臨む患者へのスピリチュアルケア

鳥取大学医学部地域医療学講座 講師 孫 大輔 編著

A5判 203頁

定価(本体2,500円+税 10%)

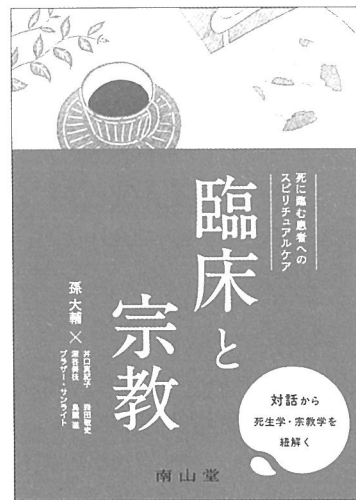
南山堂 発行

生と死をめぐる贅沢な追体験への誘い

医師、とりわけ家庭医、総合診療医としてプライマリ・ケアに従事する者は、患者や家族との継続的な関係性が育まれるなか、いかに生きたいか、あるいはいかに死にたいか、また死をどう捉えるか、といった話題に遭遇することは珍しくない。とくに、ターミナル・ケアにおいては、生や死の話題は常に頭のどこかに漂い、患者からの一言にどう答えるか、漠然とした不安を感じることも少なくない。

本書はまさにそうしたモヤモヤを丸ごと受け止め、上から目線ではなく、あくまでも一人の家庭医として悩んできた著者と同じ道のりでこの難題に向き合うことができる希有な書である。死生学を専攻する家庭医、ピハラー僧、チャプレン、宗教学者、そしてマインドフルネスを実践する求道者という5名と著者の対話は、医療と宗教の関係性、日本人にとっての宗教、仏教やキリスト教の特性、現代社会において宗教のもつ意味、と多様かつ奥行きのあるテーマが語られる。ただ、常に議論は本書の表題にある「臨床」、つまり医師として患者に向き合う現場の議論に立ち戻るため、われわれの関心が途切れることはない。

評者はとくに最後の対話に感銘を受けた。求道者は古来の葬送の文化をもつ日本の地方で育ち、神官から禅の道へ、そしてブツダ本来の座禅を求めて海外へ渡り、師と出会う。近年ビジネス界で



も話題になるマインドフルネスの本質を日々の実践を通して修得する生活は、まさに「今を生きる」ことに気づく連続。インタビューング(相互存在)、諸行無常といったキーワードは生と死を考えるうえで、日本人には最もフィットする概念と腹落ちした。

医学書にありがちな知識やノウハウの提供とは対極にある本書。日々業務に忙殺される方にこそ、休日ゆっくりとした環境でこの贅沢な追体験の時間を楽しんで欲しい。きつと、読者一人ひとりのさまざまな経験とこの追体験が融合して生じる心の重石が、臨床での不安を和らげ、喜びをもたらしてくれるだろう。

医療法人北海道家庭医療学センター 理事長
草場鉄周